



# 六華の心

酒田市立第六中学校  
学校だより 第22号  
校長 加藤 浩昭  
令和5年11月28日

## 新・生徒会が船出しました

11月24日(金)、生徒会任命式・引き継ぎ式を行いました。新生徒会長の川口未瑛さんをはじめ、立ち合い演説会・投票を通じて当選した10名の皆さんに、「公約を実現し、六中を更に一歩前進させてください!」という思いを込めて、任命書を渡しました。また、事務局長をはじめ5名の執行部員には未瑛さんから委任状が手渡されました。

任命式ではそれぞれが改めて力強く決意表明をしてくれました。引き継ぎ式では現生徒会役員から新生徒会役員に期待を込め温かな言葉を添えて各役職のファイルが引き継がれました。未瑛さんの話では「一つの輪」を大切にしたいということが繰り返し述べられました。その話を受け、私からは「3つの『わ』」を大切にしたい生徒会活動を期待する」という話をしました。1つ目は、未瑛さんの話にもあった「輪」です。残り2つは「和」と「我」です。全校生徒が伸び伸びと個性と良さを発揮できる六中、他者を思いやる温かさにあふれた六中を目指して、問題意識を持ち、みんなの声を集め、話し合い、主体的に動ける生徒会を創って行って欲しいと思っています。そして全校生徒を巻き込み、全校生徒が「**自分(自分たち)の学校**」として誇れる学校づくりをリードして欲しいと願っています。

会の後には執行部会・専門委員会が開かれました。様子を見て回りましたが、3年生の進め方に学ぶ姿、3年生の助言を受けながら一生懸命話し合いを進める姿がありました。また期待感でいっぱいになりました。

### 【新生徒会役員の皆さん】

会長	川口未瑛さん	体育委員長	中西きらりさん
副会長	斉藤 奨さん	報道委員長	梶原照英さん
副会長	栄田柚菜さん	事務局長	金子瑛音さん
議長	佐藤壮祐さん	事務局員	庄司彩寧さん
議長	石井桜子さん	書記	池田裕月さん
学習委員長	高橋美慧さん	書記	堀 琴葉さん
生活委員長	渡部航太さん	部長会長	金子眞徳さん
保健委員長	齋藤璃人さん		



笑顔と意欲を全校に広げてください。

# 来年度の新入生は113人

昨日、令和6年度の新入学予定生徒の保護者の皆様から来校いただき、入学説明会を実施しました。来年度の入学予定者は113名。全校生徒は351名、学級数はやまなみ学級も含めて、今年度と同じ15学級の予定です【11月28日現在】。

説明会では、校長から学校の概要について話をさせていただいた後、各担当から生活に関する事、学習に関する事、健康に関する事等について説明をさせていただきました。現時点では、入学式は4月6日（土）の午後の実施を考えています。

使用したスライド資料の一部

主体的・対話的な深い学びの実現

個別最適・協働的な学びの実現

一人一台端末の有効活用(GIGA)

授業改善・学びをコーディネートする家庭学習→学び心・学びに向かう姿勢

◆ 変化する・変化せざるを得ない中学校教育(六中)

自分が中学生の時とは... お兄ちゃん、お姉ちゃんの時とは... 違う!

ご理解ご協力を!

休日部活動の地域移行

小中一貫教育スクール・コミュニティ

教職員の働き方改革

◆ 六中生となる子ども達に伝えたいこと

〇「自分はどうしたいのか」「どうありたいのか」。自分軸で考え、行動できる力を身につけよう。

〇他者を尊重し、多様な価値観を持つ仲間と協働できる力を身につけよう

〇公の中で生きる私(自分)のあり方を、考え、行動できる力を身につけよう

〇「六華の心」を行動化し、応援してもらえる六中生になろう

◆ 保護者の皆様と共有したいこと

接客業という教師

私たちは普通のサービス業ではなく、ちょっと変わったサービス業に就いています。普通のサービス業の場合は相手が望むものは全て提供するわけですが、私たちは生徒が望んでも提供しない場合があります。反対に望まなくても提供する場合があります。生徒が将来困らないかどうかというのが、提供するかどうかの基準です。顧客は10年後の彼ら。つまり未来の彼らです。(後略)

・「場と状況を整えてもらわないと何もできない」そんな子どもにはしたくない。

・自分の力で立ち、自分の意思で道(生き方)を決め自分の脚で歩いて行ける子どもにしたい。

・そのために大人(保護者・教師)がやらなければならないこと、やってはいけないことについて膝を交えて相談できる関係を大切にしましょう。

## 六中生の活躍

小松日咲さん(3-3)が、第42回全国人権作文コンテスト山形県大会で日本放送協会山形放送局局長賞に選出され、12月2日(土)に村山市民会館で表彰式が行われます。式の中で作文の発表も行われます。題は「それぞれの景色に寄り添う社会」。作文の要点を紹介します。

3年前の夏、交通事故で足を骨折した日咲さんのお祖母さん。様々な事情が重なって十分な治療ができずに回復が遅れて、2年半の車いす生活を送ることに。そんなお祖母さんに寄り添い、出かけるときには車いすを押す手助けをしてきた日咲さん。慣れない車いすの取り扱いに戸惑う様子を見たお母さんからの「実際に自分が乗ってみると、見える景色も感じ方も違うはずだよ」という言葉に促され、乗ってみて初めて分かった大変さ。お祖母さんと一緒に出かける中で感じた車いす利用者目線からの不便さや十分でないバリアフリーの町づくりの課題。色々なことに考えを巡らします。そして、障がい者が身体の不自由さを理由に、何かをあきらめなければならない社会ではなく、「弱い立場の人が見ている景色に寄り添った社会を作っていくことが、社会全体の幸せにつながっていく」と結んでいます。

